一橋論叢 第十一卷 第一號

學界展望

新しき文獻學の理念

——古典復興への途——

藤井義夫

一 フィロロギーの起源

今日我々が文獻學 (Philologie, philology) と呼び慣はしてゐる言葉は、周知のやうに、他の多くの學語と同じく古代ギリシャにその起源をもつてゐる。けれどもその原語——philologia——は、たとへば哲學 (philosophia) なる言葉がさうであつたやうに、いな、それにもまして種々の意味を擔ひ、その一義的なる規定を期待することはきはめて困難である。すなはちプィロソプィアーが古き時代からしばしばその言葉の組成要素たるソプィアーと同義的に用

ひられ、その意味發展に卽應して種々の內容をもつたやうに、プィロロギアーもまたその組成要素たるロゴスそのものと同義的に語られ、この概念の多義性と運命をともにすることを餘儀なくされたからである。それ故に我々は現代における文獻學のあるべき理念を究明し、それによつて古典復興の意義と方法の問題に對して若干の示唆を與へようとする我々の課題に、まづこの言葉のもつ多義性の問題を先行せしめねばならぬ。

philologia ないし philologos なる言葉を最初に用ひたのは、我々に知られてゐる限りでは、恐らくプラトンであつたであらう。彼はかの「テアイテトス」の或る場所において、ソクラテスをして「私はプィロロギアーのために無作法なことをしてゐるのではないかね」と辯ぜしめ、また他の場所において、「テオドロス、君はプィロロゴスだよ、しかもお人よしのだよ」と呼ばしめてゐるからである。(一) そしてこれらの言葉はこゝでは對話の前後の脈絡が拒否し難く示してゐるやうに、諧謔的な氣分の下に素朴な意味において、議論（ロゴス）を愛することをないし好んで語ることを、あるひはそのやうな人を表示するために用ひられてゐる。そしてそれは「議論好きにして多辯な」(philologos kai polylogos) アテナイ人に「寡默な」(brachylogos) スパルテ人及びクレテ人を對比せしめてゐる「ノモイ」の用法を想起せしめるのである。(二)

ところでロゴスは言ふまでもなく言葉であるとともにその理據である。單なる議論が理論となるとき、それははじめて自己の存在の理由を見出し、その客觀性を主張しうることゝなるであらう。かくて眞の議論好きな人（プィロロゴス）は本源的にまた理論好きな人（プィロソポス）であらねばならぬ。プィロロゴスは、その言葉そのものが表明

してゐるやうに、なによりも理論（ロゴス）を愛し、好んで眞理を語る人である。この意味においてプラトンはつねに「ロゴスの導くところに敢へて從はふ」(ho logos hopei pherei, tautēi poreuōmetha, ei boulesthe) と念願した第一の人であつた。[三] 彼が「ポリティア」において、「プィロソポスやプィロロゴスが賞讃するところのものは最も眞であらねばならぬ」と述べてゐるのは、[四] プィロロゴスもまた哲學的精神によつて貫かれ、眞理を愛することにおいていさゝかもプィロソポスと擇ぶところなきことを確言してゐるのである。議論好きな人としてのプィロロゴスが、さきに關說されたやうに、寡默な人 (brachylogos) に對立するに反して、理論好きな人としてのプィロロゴスはむしろ理論嫌ひな人 (misologos) に對立することも明かであらう。[五] 人がミソロゴスであることは自己の無智と無策を告白する以外のものではない。「パイドン」の著名なる敍說に倣へば、あたかも人間嫌ひな人 (misanthrōpos) が他の人を無造作に眞實にして誠意ある健全な人と考へ、後にその同じ人が邪惡にして信用しえぬ人であることを發見するとき、わけても自分が最も親愛する人にあつてすらかゝる事實に遭遇するとき、凡ての人もさうであると思ひ込むところから生じるやうに、理論嫌ひな人（ミソロゴス）もまた論理上の知識なしに輕卒に或る理論を眞なりと考へ、間もなくそれを僞なりと思ふに至り、あたかも矛盾論理を研究する人々――たとへばゼノン一派の人々――においてさうであるやうに、事象の中にも理論の中にも確實なものは存在しえぬと考へるところからして生じるのである。かゝる人は眞實にして確實なるロゴスが存在するにも拘らず、自己の不用意と無能とを理論の罪に歸し、理論を嫌ひ罵りながら實在の眞理と知識 (ta onta tēs alētheias kai epistēmēs) を缺如して生を終ることになるであらう。[六] ミソロゴスがかゝるものであるならば、その對蹠者たるプィロロゴスがあたかも同じ理由からしてまたプィロソポスでもある

ことは自づから明かであらう。

さらにプラトンが言論や文藝（mousikē）に心を寄せることなくして、體育（gymnastikē）に專念する人について述べてゐるやうに[七]、理論嫌ひな人はまた非文藝的な人（amousos）であることに通じるものでなくてはならぬ。なぜならばかゝる人は他の人を說得するに理論を用ひずして、暴力によつて我意を通し、調和あり典雅な態度を持しえずしてたゞ無知と愚昧とに生きてゐるものだからである。ギリシャ人の精神的陶冶の理想を表現する mousikos なる言葉は、それに由來する近代語——Musiker, musicien, musician——が示すやうに、單なる音樂家を意味するのではなく、樂器においてよりも、他の娛樂機關においてよりも、むしろ眞に人生そのものにおいて最も美しい調和を現出し、言行一致の要求を充しうる人であり、これこそプィロロゴスたるに最も相應しいからである。[八] かくてプィロロゴスはムーシコスであり、より嚴密には文藝好きな人（philomousos）となるであらう。イソクラテスの次の言葉もまたこの意味に解されなくてはならぬ。「機智に富むことやプィロロギアーは言論の敎育に勘からざる部分を寄與する[九]と思はれる」。またアリストテレスが「修辭學」第二卷の一つの場所——彼自身によつてこの言葉が使用された唯一の箇所である——において、「全くプィロロゴスでなかつたスパルテ人たちはキロン（七賢人の一人）を長老の一員とした」と書いたとき[一〇]、このプィロロギアーなる言葉は同じ關聯におけるプラトンの用法から判然と區別されて、彼らが「議論好きにして多辯な」人でなかつたことをではなく、むしろ文藝に對する素養を全く缺いてゐたことを、さらに一般的には彼らが全く無敎養な人（apaideutos）であつたことを意味したやうに思はれる。從つて或る古代哲學史家がこの書のドイツ譯において、この言葉を „Freunde der Wissenschaft und Bildung" を以て表現したことは全く

正當であると評されねばならない。[一] 我々はさらにキケロについて、彼の多彩にして多義なる用法のうち、とくに重要なものとして、彼が、「アッティカ人への書簡」において、フィロロギアなる言葉をやゝ限定して哲學をも含めた廣義の文學の研究の意味に用ひ、「我々のフィロロギアに對する辛苦は水泡に歸することになるであらう」(opera et oleum philologiae nostrae perierit) といふ著名な言葉を遺してゐることを、またプルタルコスが政治家 (politikos) と文學者 (philologos) とを明別したやうに、彼もときとして國事に關する緊要な問題 (spoudaion) を文學的なそれ (philologa) に對比して用ひたことを附言しておけば充分であらう。[二]

紀元前三二三年、アレキサンドロス大帝の陣歿によつて彼の雄圖が挫折し、その帝國が瓦解した後、それに續く世紀において、かつての學藝の中心地アテナイからその精神的支配權が大帝の名を冠するエヂプトの首都に移讓され、そこに凡ゆる領域にわたる專門學が勃興して、史家のいはゆる「アレキサンドレイア時代」が現出した。そしてこゝでもかのアテナイの哲學の巨匠たちの著作は權威ある古典として多くの學者の尊崇を集め、そしてその周匝な研究が企てられたけれども、彼らの學的關心の對象となつたのはたゞその死せるロゴスの訓詁學的、書誌學的詮議であつて、かの生けるロゴスの體現ではなかつた。ギリシャ精神はこゝにその亞流者たちによつてその墓碑銘を刻まれる運命をもつた。かゝるアレキサンドレイア時代の專門學的風潮を反映してプィロロギアーも敍上の諸義から博學 (polymathia) の意味に變容した。彼らにとつて教養に專念する人 (spoudazōn peri paideian) は、かつてソプィストの時代にさうであつたやうに、凡ゆる學問に通曉する人であつた。そしてアルキメデスの同時代人であり、學としての地理學の創始者として名聲を馳せたエラトステネス (Eratosthenes) は、自己をかゝるポリュマティアーの意味におけるプィロ

ロゴスと呼稱した最初の人であるといはれてゐる。(一三) 事實彼は地理學者であると同時にすぐれた天文學者であり、數學者、年代學者であつて、その至らざるなき博學は人々を驚かすに充分であつたけれども、そして彼がときとして哲學者と呼ばれ、詩人と稱せられたにしても、彼は言葉の本來の意味における哲學者でも文學者でもなかつたのである。(一三) こゝからしてプィロロゴスはさらに一般的な意味において學者ないし學究を表示する言葉として廣く用ひられ、その動詞形 philologein も究學する (studere) の意味に用ひられるに至つた。(一四) アリストテレスの名によつて傳へられるところの「プロブレマタ」の著者がその第十八章において「プィロロギアーに關する諸問題」(Hosa peri philologian) のうちに讀書、論爭、辯論、哲學、文學などの論議を包含せしめたのもかゝる用法に連るものであらう。(一五)

しかし我々は今こゝに古代の著作家におけるプィロロギアーないしプィロロゴスの用法を凡てにわたつて涉獵する遑はない。またその派生的意味を仔細に吟味することも我々の意圖ではない。(一六) 我々はたゞこれらの言葉がもつたであらうところの諸々の意味のうちに主要なる三つの發展段階を劃し、それがロゴス (言葉) を愛するといふ根源的意味からして、プィロソプィアー (哲學)、プィロムーシアー (文學)、ポリュマティアー (博學) の三つの——恐らくこの言葉が內包しうる凡ての——意味に用ひられたことを明かにすることによつて、近代的なフィロロギーの概念規定へのそれ自身文獻學的な準備をなしうれば充分なのである。

(一) Theaet. 146 A, 161 A.

(二) Legg. I 641E. なほ Strabon; III 3, 7. Athēnaioi men philologoi, Lakedaimonioi d'ou. Alexis; oinos philologous pantas poiei ktl. (Comicorum Atticorum Fragmenta II 400) などの用法を參照。 かゝる根源的意味についてはとくに

Pauly-Wissowa-Kroll; Real-Encyclopädie der classischen Altertumswissenschaft XIX 2 (1938) における Abbotts Art. philologos を参看せよ。

(三) Resp. III 394D. Legg. II 667A. かゝる關聯におけるロゴスの意味につゐては Phaed. 99D—100B を参看せよ。なほ Aall; Geschichte der Logosidee in der griechischen Philosophie 1896. S. 68ff. 參照。

(四) Resp. IX 582 E.

(五) Laches; 188 C. この場所のフィロロゴスを Theaet. 161A における用法と比較せよ。(Phaedr. 236E における anēr philologos をかゝる二義を可能的に含んだものとみることができる。) しかしシュミットはかゝる區別を認めてゐないやうである。Da Plato logoi vorzugsweise von wissenschaftlichen Gesprächen braucht (Wohlrab zu 161A), so bezeichnet philologia bei ihm das Wohlgefallen an solchen Gesprächen, mögen sie nun von anderen geführt werden, wie 161 A und Lach. 188C usw. (H. Schmidt; Exegetischer Commentar zu Platos Theätet. 1880 S. 88). なほこの場所の解釋及びフィロゴスの一般的意味につゐては田中美知太郎「フィロゴス」(思想第二百八號) を參照。

(六) Phaed. 89D—90D.

(七) Resp. III 411C—E.

(八) 註五參照。

(九) Antid. 296.

(一〇) Rhet. II 23, 1398 b 14. なほ同じ用法はたとへば Philostratos; Vitae Sophistarum 1 5, 486 Libanios; Epistulae 1066, 3 などにも見出される。

(一一) Stahr; Aristoteles' Drei Bücher der Redekunst[3] (Lang. Bibl. Bd. XXI) S. 203. なほ Cope-Sandys; The Rhetoric of Aristotle. 1877. II p. 262. Comm. ad loc. 參照。

(一二) Epistulae ad Atticum II 17, 1. XIII 52, 2. Plutarchos; Lyk. 42. Vitruvius VII praef. 8.

(一三) Suetonius; Gramm. 10. Strabon XVII 8, 794. Vitruvius VII praef. 4 etc. Pohlenz; Der Geist der griechischen Wissenschaft. 1928. S. 23.

(一四) Epiktetos; II 4, 11. III 2, 13 etc. Plutarchos; Alex. 8.

(一五) Pseudo-Aristoteles; Problemata. XVIII. この著書は明かにペリパトス學派に由來し、種々の機會に編纂され、現在の形式をとるに至つたのは紀元五世紀以前ではなかつたと思はれる。

(一六) これらの問題については Steinthal; Geschichte der Sprachwissenschaft bei den Griechen und Römern. 1890 f. Bde. II. Lersch; Sprachphilosophie der Alten 1841 Bde. III. Graefenhan; Geschichte der klassischen Philologie 1843. Bd. 1. Sandys; History of Classicl Scholarship. Vol. 1. などを參照せよ。

二　プィロロゴスとグラマティコス

敍上においてほゞ明かにされたであらうやうに、古典時代のギリシャにあつては、プィロロギアーなる言葉は或る特殊なる學問ないし知識をよりも、汎く哲學的なる精神あるひは文學的なる教養 (paideia) を意味し、その限りにおいてプィロロゴスはプィロソポスないしグラマティコス (grammatikos) の如き特定の知識階級を指稱するものではなかつた。そしてたとへばセネカは彼の書簡において、プィロロゴスを歴史的研究に、グラマティコスを言語學的研究に限局しようとの意向を寓してゐるけれども、[1] 古典的古代にあつては、あたかもプィロロゴスがプィロソポスでもあつたやうに、またそれはグラマティコスからも明別されなかつたやうである。このことは恐らく次の事實から容易

に了解されうるであらう。

近代語 Grammatiker, grammairien, grammarian の語根として、もともと文字を表示した grammma (ta grammata) はいはゆる讀み書きをも意味し、從つてグラマティコスとは一應の讀み書きのできる人、すなはちグラマタの心得ある人であつて、決して文法學者でも言語學者でもなかつた。そしてかゝる初等教育に滿足することなく、さらに進んで自由人に相應しいところの高い教養を受けやうと欲する人は言語の生理學的知識、すなはち音聲の性質、その生理學的發生、分類などを學ぶことをつねとした。プラトンやアリストテレスがグラマティケーの下に理解したのはかゝる音聲の學的考察を第一義とするものであつた。(二) 從つてそれは主として韻律論及び音樂論の關係において取扱はれ、むしろ韻律論の一部であり、これらを教へる人もまたグラマティコスあるひはムーシコスと呼ばれた。(三)

グラマティケーがひとつの獨自的なる學として、我々が今日フィロロギーと名づける學の內容をもつに至つたのは、言ふまでもなく、アレキサンドレイア時代においてであるが、かゝる意味轉化に最初のそして決定的な役割を演じたのはペリパトス學派の人、プラクシパネスであつたであらう。そしてそれは從來文字、書簡、碑文、公文書などに限られたグラマタの意味が著書 (literae) にまで擴大されたことに對應するものであつた。そもそも著作家が特殊の職業としてギリシャ世界に出現したのは、恐らくソフィストたち及びその追隨者たちを以て嚆矢とするであらう。すでにプラトンがプァイドロスをして同名の對話篇の或る場所において語らしめてゐるやうに、(四) 當時の有力なるそして名聲ある政治家たちは、後世の人々が彼らを目してソフィストと呼ぶであらうことを惶れて、自己の所論を著述したり、自己の名において著書を遺したりすることを潔しとしなかつた。そして一般民衆もまた書物を讀むことよりも演說を

聽くことに慣れ、從つて書物の數も甚だ僅少であつたと思はれる。しかるにディアレクティケーを諸學の中心においたプラトンのアカデメイア學派に對抗して、レートリケーを教科の主題としたイソクラテスの學派は、アリストテレスの時代に、新興の讀書階級のために著述することを始めた。そしてかつてソプィストたちによつて論爭のための有力な武器に利用されたレートリケーは、アリストテレスが明確に定義したやうに[五]、論爭の様式（agōnistikē lexis）——それは議會上のものと法廷上のものとを含むであらう——と著述の様式（graphikē lexis）の二つに區別され、それは辯論術であるとともに修辭學の內容をもつに至つたのである。かくしてさきに言はれたやうに、グラマタが民衆の讀書（anagignōskein）のための著書——この著者はそれ故にアナギグノースティコスと呼ばれたといはれる——の意味に擴大されたとき、グラマティコスも著書あるひは文獻の研究者、すなはち傳承された原典の批判、その言語學的、事象的理解を主たる仕事とする人、從つてすぐれた意味におけるプィロロゴスとなつたことも會得し易き理であるであらう。

このやうにグラマティコスは著書ないし文獻の——最初はとくにホメロス原典の、後にはヘシオドスの敍事詩あるひは他の抒情詩人、悲劇作家、散文作家などの作品の——校訂（recensio）、解說（interpretatio）、批判（iudicatio）を主たる任務とする。從つて彼は或る作家の眞作を僞作から區別し、そしてその作品を評價し、その美點と缺點とを指摘しうるのでなくてはならぬ。この活動はなによりも批判（krisis）と名づけられるに相應しいところからして、グラマティコスはこの點においてまたクリティコスの名を以て呼ばれ、ローマ時代にはこの二者はしばしば區別して用ひられた[六]。そしてこの言葉もすでに古き時代から存在したけれども、かゝる特殊の意味をもつに至つたのは比較的

新しい時代に屬するもののやうである。これらの事實はグラマティコスが文法學者であるよりも文獻學者であり言語學者であつたことを保證するであらう。かゝるものとしてのグラマティケーは、周知のやうに、アレキサンドレイア學派の代表者たるゼノドトス (Zenodotos)、ビサンティオンのアリストファネス (Aristphanes Byzantius)、アリスタルコス (Aristarchos) 及びその反對派たるペルガモン學派の首領、クラテス (Krates) によつて確立されたのである。[七] そしてアリスタルコスの弟子ディオニュシオス・トラクス (Dionysios Thrax) の劃期的著作「文法論」(Techné Grammatikē) によつてはじめて近代的意味における文法學的體系が樹立されたのであり、[八] 斯學の興隆をみたのは紀元二世紀以後のことであつて、それ以前にあつては尠くとも現代の形式的意味における文法學者としてのグラマティコスは存在しなかつたと言ひうるであらう。

しかし我々はこれらの問題、とくにプィロロゴス、グラマティコス、クリティコスなどの由緒ある用語の歴史及びそれらの意味關聯についての周匝な敍述を、シュタインタール、レルシュなどの古典的な著作に讓らねばならぬ。我我の敍上の素描的論述の目的はフィロロギーを言語學 (Sprachwissenschaft, Linguistik) と同義に解しやうとする傳統的なるそして現代においても支配的なる用法の由來が奈邊にあるかを示唆するところにあつたのである。[九]

(一) Ad Lucilium Epistulae LXXXVIII 3 Grammaticus circa curam sermonis versatur et, si latius evagari vult, circa historias, iam ut longissime fines suos proferat, circa carmina, 42. なほとくに CVIII 30-34 における philologus, grammaticus, philosophus の區別を參照せよ。

(二) Metaph. IV 2, 1003 b 20. XI 8, 1064 b 26.

(四) Steinthal; op. cit. I, S. 127 ff.

(四) Phaedr. 257D—E.

(五) Rhet. III 12. Clemens Alex.; Stromata I 16, 79. 3. Gudemanns Art. Kritikos (Pauly-Wissowa-Kroll; Real-Encyclopädie) など參照。

(六) Steinthal; op. cit. II S. 17 ff. Lehrs; De discrime vocabulorum philologos, grammatikos, kritikos, (Anhang zu Herodiana scripta tria). 1848. 參照。

(七) Zenodotos, Aristophanes Byzantius, Aristarchos, Krates などについては前註に引用された諸著を、アレキサンドレイア學派一般についてはとくに Barthélemy Saint-Hilaire; De l'École d' Alexandrie 1845. Simon; Histoire de l'École d' Alexandrie. Toms. II. 1844 f. Vacherot; Histoire Critique de l' École d' Alexandrie. Toms. III. 1846 ff. など參照。

(八) Dionysios Thrax はどザンテイオンあるひはアレキサンドレイアの人。紀元前八十年頃ローマに來り、修辭學、文法學の教授をした。彼の數多くの著作の中、我々に傳へられてゐるのは Technē Grammatikē のみである。この書は原典あるひはラテン譯を通じて近世の文法學に基礎を與へたものであり、久しい間文法學の權威ある教科書として採用された。なほこれらに關する諸問題については Classen; De Grammaticae Graecae Primordiis 1829. Egger; Essai sur l'Histoire des Théorie Grammaticales dans l' Antiquité 1854. など參照。

(九) 現代の romanische, germanische, englische, slavische, chinesische Philologie 等の用法はこれに對立するものである。しかし一方 Philologie を Klassische Philologie の意味に限り、上と同樣この中に Grammatik のみならず、Lexikographie, Textkritik, Hermeneutik, Epigraphik, Numismatik などをも含ましめ、他方言語學的意味における Philologie に Lingnistik なる言葉を當て、これから區別しようとする傾向も存在することは注目さるべきであらう。

三　「古代學」としての文獻學の成立

ルネッサンスにおけるギリシャ學研究の復興以來、文獻學は再び好學家の貴重なる共有財産となつたけれども、やがてこの學に對する關心は急速に凋落をみせ、それが「古代學」(Altertumswissenschaft) として新しく體系づけられるに至つたのは、十九世紀の初葉におけるドイツの天才的文獻學者ヴォルフ (Friedrich August Wolf) 及びボェック (August Boeckh) の著作的活動によつてである。(一) しかもそれは十八世紀の後半に輩出したヴィンケルマン、レッシング、ヘルダーその他の卓拔なる文人の開拓したギリシャの文學、哲學、歷史學、考古學、藝術への通路によつて準備されたものであつた。新しく發足した文獻學の理念は古典的古代の凡ゆる領域にわたる知識を前提してゐるからである。

一七六四年に現はれたヴィンケルマン (Johann Joachim Winckelmann) の不朽の名著「古代美術史」(Geschichte der Kunst des Alterturns) はルネッサンス以後忘却の淵に投ぜられたギリシャ美術に新たなる息吹きを與へたのみでなく、考古學、文獻學、歷史學の進歩に對しても凌駕し難い寄與をなした。ホメロスに養はれプラトンに勵まされたこの「晩學の人」の驚嘆すべき直觀力は、ローマにおける古代美術の模造品及びローマ後期の藝術品そのものを通して彼が近づくことをえなかつたギリシャの原型の美しさを構想するに充分であつた。「藝術の歷史は」と彼はこの書の序文で言つてゐる、「その起源、生長、變遷、沒落、ならびに民族、時代、藝術家の樣々の樣式を教へ、そしてこれを現存する古代の作品から、能ふ限り證明しなくてはならない」。(二) そして彼は保存され傳承された藝術作品の詩

的感受性豊かな描寫を以つて文獻による證言の貧しさを補ひながら、古代藝術の繪卷物を我々に展開してみせるのである。それはその後に發掘された古代美術によつて啓示され革新された斯學研究の現段階からしては幾多の批評の餘地を藏するであらう。けれども原理的なる點においてはそれは今日なほ我々に高い學的價値を要求しうるのである。こゝにはじめて創造活動の領域に有機的生命の法則が適用された。彼によれば、藝術品は決して單なる意志活動によつて成立し、技術的精巧さにその價値が求められる如きものではなく、同時にその時代の精神的潮流ないし嗜好に依存するところの形式附與であらねばならぬ。藝術の生命はその國民の生命と分ち難く結ばれてゐる。かくてギリシャ藝術に對する彼の透徹した理解の仕方は、ギリシャ精神の最も古典的なる側面を全く新たなる照明の下に置いたものと言ふべきであらう。

ソプォクレスの悲劇作品と、アリストテレスの「詩學」に演劇の理想を見出したレッシング (Gotthold Ephraim Lessing) はヴィンケルマンのかの著作に動機づけられ、その原理を詩作の理論に適用しようとして、一七六六年にかの「ラオコーン」(Laokoon, oder über die Grenzen der Malerei und Poesie) を書き、さらに Sturm und Drang の運動に強い刺戟を與へたヘルダー (Johann Gottfried Herder) は一七六九年レッシングの「ラオコーン」に捧げて「批判論叢」(Kritische Wälder od. Betrachtungen die Wissenschaft und Kunst des Schönen) 第一輯を出し、それに先だつ二年、すなはち一七六七年「ドイツにおけるギリシャ文學について」書いた。[111] そして凡そ二十年の後、ゲーテがローマに滯在して古代藝術を研究し理解しつゝあつたとき、彼は斷へずヴィンケルマンの記憶によつて導かれ、そこで彼は「近世の古典」といはれるところの「イフィゲーニエ」(Iphigenie auf Tauris) の構想をえたのであ

る。あたかもヘルダーの民謠における詩の發見がホメロスへの理解を近づけたやうに、イタリアの太陽の下に成熟したゲーテの諸戲曲はアッティカの悲劇への通路を拓き、それによつて同時代人の眼をギリシャ精神にむけることができた。そしてシラー (Friedrich Schiller)、シュレーゲル (Friedrich von Schlegel)、フンボルト (Wilhelm von Humboldt) なども同じ道を歩む光榮をもつた。彼らは等しくギリシャの藝術と文學の中に、いな、ギリシャ民族そのものの中に人間教化の理想を、精神と肉體、形式と內容との醇乎たる調和を見出したのである。しかし我々は周ぐ熟知されたこれらの事實に多くの言葉を費す必要はないであらう。[四] これらドイツ文化とドイツ精神の創造者たちは、もちろん、直接に古代學的文獻學の體系構成に參加したのではないけれども、かつてプィロロゴスがムーシコスであつたやうに、彼らもギリシャ的意味においてすぐれてプィロロゴスであり、文獻學によき地盤を提供した人たちであると言つても過言ではないであらう。

このことは最後に擧げられたフンボルトについては特別の意味をもつてゐる。なぜならばこの點に關する彼の思想を知るための主要なる典據とみらるべき「古代、特にギリシャの研究について」(Über das Studium des Altertums, und des Griechischen insbesondre) なる一文は一七九二年アウレーベンにおけるヴォルフとの會見を起緣として彼の慫慂によつて書かれ、そしてこの偉大なる文獻學者もまた彼の「古代學敍說」(Darstellung der Altertumswissenschaft. 1807) の中に、フンボルトの名を明示することなしに「或る高貴なる學者の思想」としてこれに言及してゐるからである。[五] それ故に我々は古代研究の價値と意味とに關するフンボルトの思想に若干觸れておかねばならぬ。

彼によれば古代の遺物——文學及び藝術作品——の研究は質料的と形式的との二重の效用をもつであらう。前者は

他の諸學に資料を提供し、その補助學となる限りの效用である。後者はさらに二つに區別される。すなはち古代の遺物をそれ自體において考察する限り生ずるところの效用は審美的 (aesthetisch) であり、それが發生した時代の作品として考察される限り生ずるものは古代そのものの、あるひは古代における人間性の認識 (die Kenntniss der Menschheit im Altertum) である。そしてこゝでは主として最後の效用が問題にされなくてはならぬ。あたかも歴史が一般に人間認識を擴大し、判斷力を鋭敏にし、性格を改善するやうに、或る國民の性格が凡ての側面からその全體的關聯において、すなはち個々の性格特徴相互の關係のみならず外的環境への關係において研究されるとき、そこに與へられるいはゞひとつのビオグラフィーも、それ以上の價値をもつであらう。こゝにいはゆる人間認識とは、たとへば個々の人間の集團を觀察し、その外的行動からその内的意圖を憶測する技能をうることではなく、種々の知的な、感情的な、そして道德的な人間の諸力及びその變容の認識、ないしそれらの外的環境への關係の認識であり、つまり内部から起る變化の必然性と外部から起る變化の可能性の法則の認識である。かゝる認識は人間の最も高貴なる目的の全體、すなはち人間の最も調和ある最高の完成を達成するために、歴史家、哲學者、藝術家などにとつてのみでなく、また行動しあるひは單に享受するだけの人間にとつても必要である。[六] ところで個々の國民の性格に即して、彼らの遺物から人間一般の研究をなすことがどの程度に可能であるか、には凡そ次の四つの條件を考へることができるであらう。一、現存する遺物はその國民の精神なり性格なりの忠實な表現であるかどうか。二、國民の性格が多面性と統一性とをもつてゐるかどうか。三、種々の形式の多樣性に豐かであるかどうか。四、國民の性格が凡ゆる境位において、個人的差異に關はりなく、そこに存在しうべき人間一般の性格に最も接近してゐるかどうか。そしてフンボル

トは古代、とくにギリシャの國民がこれらの條件をいかに理想的に充足してゐるかを證示することにおいてまことに說得的である。彼の論旨に從へば、近代國家の言語が多くの外來語を轉用し、哲學もそれによつて改造され、つねに抽象普遍的であり、またその歷史も凡ゆる時代と地域に通曉することによつて個性を失ひ、詩も他國の神話を藉り客觀的なる一般理論によつて形成されるに反し、ギリシャにあつては言語も哲學も歷史も詩もすべてより純粹であり個性的である。またギリシャ人における最も獨自的なる現象の一つは、彼らがなほ初期民族に共通なる粗野の跡を殘しながら、自然及び藝術の凡ゆる美しさに對する異常なる感受性と精煉された技巧と正しい嗜好をもち、ギリシャにおける肉體的、精神的教養も美の理念によつて導かれ、もつて國民的性格の中に多面性と統一性との調和が存することである。もちろんその決定的なる國民性格からして古代人に近代人の如き多樣性を望むことはできないけれども、ギリシャ人の想像力は外的にも內的にも刺戟に對してきはめて銳敏であり、彼らの教養に對して多樣なる形姿を附與し、宗教も國民の信仰及び情操に支配權を振ふことなく、道德性の理念も精神の桎梏となることがなかつた。かくてギリシャ人の性格において人間性一般の根源的性格が最も端的に示される。(七) それは最も個性的でありながら、全國民の間に漲る美への感情によつてまた最も調和的であり人間性の理念 (Humanitätsidee) そのものの具現である。フンボルトのかゝる思想をヴォルフが如何なる共感と親愛を以て迎へたかを我々は直ちに見るであらう。

一七七七年四月八日、十八歲のヴォルフが、文獻學的研究は神學の附隨學科であるといふ當時の通俗的意見を破碎し、敢然 philologiae studiosus としてゲッティンゲン大學に入學を許されたとき、文獻學そのものも新しく誕生したといふことができる。若冠の彼はすでにこのとき、文獻學が獨立した學として自己の生存權を主張しうべきことを

充分確信してゐたからである。二十四歳にしてハレ大學の講壇に立つた彼は一七八五年の夏、すなはち彼の大學活動の五度目のゼメスターにおいてはじめて「文獻學全科」(Encyclopaedia philologica)の講義を行つた。そしてこゝに明かな自覺に達した「古代學」(Altertumswissenschaft)としての文獻學の理念は、さきに關說されたところの一七九二年におけるフンボルトとの活潑な會談によつて成熟し、一八〇七年「ギリシャ精神の通曉者であり敍述者であるところのゲーテ」に獻呈した「古代學敍說」(Darstellung der Altertumswissenschaft)の中に結實したのである。(八)

文獻學とは彼にとつては古典的古代の學であり、なによりもその對象、範圍、部分、效用などの知識及びその方法の敍述である。(九) そしてその目的は有機的に發展した意味ある國民形成を、古代の遺物の研究を契機として考察することから生じる古代の人間そのものの認識である。この認識を通じて我々は「精神と心情との調和ある完成」を期待しなくてはならない。これらの思想が如何にさきのフンボルトの所論と相覆ふものであるかは明かであらう。(一〇) 文獻學者にとつて研究の資料となるのは、あたかも神學者にとつて聖書がさうであるやうに、古代の遺物である。それは文學作品 (opera literata) と藝術作品 (opera artificum) である。そしてそれらの考察の仕方には、我々が學ぶといふ歷史的態度と我々が味ふといふ審美的態度とが區別されるであらう。さらにこの文獻學者は古代の研究が經過すべき興味ある三つの段階を區劃してゐる。すなはち古代から學ぶためにそれを理解しようとする段階、古代を模倣しその上に自らのものを建設しようとする段階、及び古代の理解を神學、法學、醫學などの豫備知識として、すなはち文獻學を他の諸學の婢として利用する段階。しかし我々はこれらの問題に深く立ち入る必要はないであらう。(一一)

ヴォルフの二十三年にわたるハレでの活動はドイツの文獻學研究に新しい生命を與へた。彼の講義はこの上もなく

示唆に富み、學生は直ちに彼に傾倒したといはれる。ゲーテもワィマールから彼を聽くためにハレに來た。しかしヴォルフの偉大さは著作家としてよりも、教授として多くの有能な弟子を養成したところにあると言はれねばならぬ。そして我々はその中に師の後繼者たるボェックを見出すのである。

文獻學を古代學として發見したのは、敍上のやうに、ヴォルフその人であつたが、そこでは古代學はなほ文獻學的諸學科の集成であつてなほ學としての嚴密性を把持したものではなかつた。これを方法的に體系づけたのはボェックである。彼は二十一歳にしてハイデルベルクのギリシャ文獻學の教授として講壇に立ち、彼の嘖々たる名聲は一八一〇年三十五歳の彼を新しい希望としてベルリン大學に迎へしめたのである。(一二) 彼はこゝで最初ギリシャ人の經濟生活の究明に專念し、その研究成果たる「アテナイ人の國家經濟」(Staatshaushaltung der Athener. Bde. II 1817) は、あたかもヴォルフの「ホメロス序說」(Prolegomena ad Homerum 1794) が文獻學そのものの序說を意味したやうに、舊套を脫しえざる斯學に新たなる光明を導き入れもつて彼の名を不朽のものとしたのである。(一三) しかし我々はこれについての敍述をこゝには割愛しなくてはならぬ。

彼が久しきにわたつて講義し、文獻學的方法の理念を樹立した「文獻學的諸學の全科と方法論」(Enzyklopädie und Methodologie der philologischen Wissenschaften) は彼の死後、弟子の一人によつて一八七七年に出版され、その古典的位置を確實なものとした。周知のやうに、彼の定義によれば、文獻學は「認識されたものの認識」(Erkenntnis des Erkannten) であり、「生產されたものの再生產」(Reproduktion des Produzierten) である。(一四) しかしてこゝにいはゆる認識されたものとは最も廣義に解されねばならぬ。すなはち概念において把握されたもののみでなく、人間

精神がその中に表象されるところの象徴、記號をも含み、從つて藝術作品、詩、歴史もこれに屬する。もちろん文獻學的研究は認識の最も一般的な道具たる言語から着手されねばならぬけれども、「古代の再構成」をなすためには、我々はそれに止ることはできない。もしさうであるならば、文獻學は歴史學といかに區別されるであらうか。最も廣い意味では兩者の概念は一致する、と彼は答へる。歴史的なるものは行動に移されたところの精神的なるものである。その區別は實際的のものに過ぎず、歴史學は主として政治的なるものに限られ、國家に關聯した限りの文化生活を考察する。かくて彼にとつて文獻學は、ヴィンケルマン、レッシング、ヘルダーなどの精神的傳統に從つて、古代の生活を全體としてその精神を探究することであつた。そしてそれは「古代學の全科」なる主題が明示してゐるやうに、かつてのポリュマティアーの精神を汲むこととなつたのである。我々が「認識されたものの再認識」をなす場合、その對象たる古代の研究がとくに價値をもつのは、すでにフンボルトが明かにしたやうに、古代が、凡ゆる人間認識の archē を含み、それが原始的であるとともに原理的なる認識を、それ故に平俗的なるものではなく、最も高貴なるものの認識が與へられるからに外ならぬ。こゝに人間性の理念の純粋な象徴がみられるからである。

(一) Bursian; Geschichte der classischen Philologie in Deutschland. Bde. II 1883. L. Müller; Geschichte der klassischen Philologie in den Niederlanden. 1869. などを參照せよ。

(二) Geschichte der Kunst des Altertums². (hrsg. v. J. Lessing) 1882. S. 5.

(三) Über die neuere Deutsche Litteratur. 1767. Zweite Sammlung von Fragmenten. IV. Von der Griechischen Litteratur in Deutschland. (Herders Sämmthiche Werke hrsg. v. Suphan 1877. Bd. 1)

(四) これらの精神史的位置については、とくに Dilthey; Der Aufbau der geschichtlichen Welt in den Geisteswissen-

schaften (Gesammelte Schriften Bd. VII) 1927. S. 93 ff 參照。

(五) Wilhelm von Humboldts Gesammelte Schriften (hrsg. v. König. Preu. Ak. d. Wiss) Bd. 1 S. 434. Als Wolf 1807 den ersen Band seines Museums der Altertumswissenschaft mit der grundlegenden, Goethe gewidmeten „Darstellung der Altertumswissenschaft" eröffnete, brachte er in zwei längeren Anmerkungen (S. 126-129, 133-137), ohne den Namen des Verfassers zu nennen, eine Reihe philosophischer Sätze über antike Studien, die er als „einige in einem Briefwechsel verstreute Gedanken eines Gelehrten, symphilologountos tinos poth' hēmin kalon kágathon" einführte.

(六) W. v. Humboldt. op. cit. I. S. 255 ff.

(七) W. v. Humboldt, op. cit. I. S. 264 ff.

(八) 彼の傳記につゐては Körte; Leben und Studien F. A. Wolfs, des Philologen, 1833. Paulsen; Geschichte d. Gelehrten Unterrichts II. 1897. 208 ff. Bursian; Gesch. d. Klass. Philol. I. 彼とフンボルトとの關係につゐては Spranger; W. v. Humboldt und die Humanitätsidee 1909. を參照。

(九) Vorlesungen über die Enzyklopädie der Altertumswissenschaft. (hrsg. v. Gürtler) 1831. S. 5.

(一〇) Museum der Altertumswisensschaft 1807. I. S. 124 ff.

(一一) Wach; Das Verstehen. Bd. I. 1926. S. 66 f.

(一二) 彼の傳記につゐては Curtius; Gedachtnisrede. 1864. (Altertum und Gegenwart III 115-135), Lenz; Geschichte der Universität zu Berlin Bd. II. 等參照。

(一三) この點につゐては Gooch; History and Historians in the nineteenth century 1920. p. 30 ff. 參照。

(一四) この思想は到るところに示されてゐる。Encyklopädie; S. 10 ff.

四　結　語

我々は歴史的なることがらについて語り過ぎたやうである。我々の目的は「文獻學の歴史」を迹づけることにあつたのではない。すでにシュレーゲルが「アテネウムの斷片」の一つに書き殘したやうに、「古典的に生きそして古代を實踐的に自己の中に實現することが文獻學の頂點であり目的である」(klassisch zu leben und das Altertum praktisch in sich zu realisiren, ist der Gipfel und das Ziel der Philologie)ならば、そしてあたかもそれ故に、古典復興の意義を宣揚し、古典的世界を現代に生かす方途が文獻學を通じてのみ可能であるならば、かゝるものとしての文獻學が如何にあるべきかを能ふ限り闡明することが我々の意圖なのである。

「古代學」としての文獻學は、すでに絮說されたやうに、古代の精神生活の全體的叙述を、從つてその公的ならびに私的生活、宗教、藝術、さらには神話、哲學、文學、言語など「古典的古代の凡ゆる知識」をその內容とするものであり、その限りにおいて古代のポリュマティアーの意味に連るものであつた。けれどもそれら多樣なる知識の單なる集大成は、未だ文獻學を學的に價値づけるものではない。むしろボェックも明說してゐるやうに、古代の精神をその凡ゆる關係において把握すると同時に、個々の事實をその性格の統一性に融和せしめ、凡ゆる個別性においてその統一性を直觀することが古代學の最高の目標である。かゝる規定からして導かるべき當然の歸結は、文獻學と歴史學との接近である。そして兩者の差別は、すでに上に見たやうに、たかだか後者が政治的なるものをその主要領域とするところに求められるであらう。事實ニーブールからエドアルト・マイヤーに至る歴史學がその固有の分野として好

んで國家あるひは國制の發展を選んだことは確かである。けれども文獻學がつねに古代文學の遺品に、歴史學がつねに國家や軍事の發展にその敍述を制限さるべき理由は存在しない。前者もギリシヤ文學と同じくギリシヤ憲法や古代社會を論じうべき筈であり、後者もギリシヤ政治史と同じく古代美術史を考察してよい筈である。この意味において、この探究領域においては、歴史家も狹義の古典的素養、すなはち言語を缺如しえず、文獻學者も歴史的思惟と歴史的基礎概念とを必要とする。從つてかゝる觀點においては兩者は區別しえぬであらう。(三)

かゝる見解を最も有力に代表してゐるのはヘルマン・ウーゼナーであらう。彼はかの古典的なる論文「文獻學と歴史科學」(Philologie und Geschichtswissenschaft 1882) において、文獻學を學 (epistēmē, Wissenschaft) であるよりも術 (technē, Kunst) であると解し、(四) 文獻學的解釋と歴史的認識とは分離し難き相互關係においてあり、かつ、凡ゆる文獻學的活動の基礎は文法學であるといふ立場から、文獻學は歴史科學の基礎的、規範的なる方法であると述べてゐる。なぜならばそれは言語的形式の認識の中に傳承されたものの正しい理解に對する最後の保證をもつからである。從つて彼によれば結局文獻學的方法論及び全科は歴史學と名づけられ(Philologische Methodenlehre und Enzyklopädie darf ich Historik nennen)、文獻學者は歴史科學の先驅者に外ならぬのである。(五) けれどもこのやうに文獻學を單に「目的への手段」であり、歴史學の補助學に過ぎぬと解することは、すでにフンボルトが明晰に指摘したやうに、文獻學の質料的效用のみに着目して、その形式的效用を視外に逸するものと評さるべきであらう。

文獻學も歴史學も——古代に關する限り——ともに遠い過去の凡ゆる遺産を探究の手段とし、またそこからして古代世界の形象を再構成するために、校訂と解釋と批判とを缺くべからざる方法として援用する。從つて兩者を區別す

るのはその對象ないし方法であるよりも、その「價値的視點」(Wertgesichtspunkt) であらねばならぬ。周知のやうに、歴史 (Geschichte) は生起したもの (das Geschehene) を根據とし、その發展の因果的系列を辿つて、それを經驗の目的にまで永遠化するが、文獻學はなによりも創造されたもの (das Geschaffene) にむかふ。それは永遠なるものの象徴として、自らの調和に安んじ、感性的なる現實性の中に眞理の世界、自由の世界、美の世界を顯示する。歴史家にとつて生起したものは認識への手段に過ぎぬけれども、文獻學者にとつて創造されたものは理解の目的そのものである。かしこでは古代的世界が、しかしこゝではむしろ古典的世界が問題とされる。我々が文獻學と歴史學との本質的差異を求めうるのはまさしくこゝにおいてである。しかし我々はこの問題の周匝なる研究を他の機會に讓つて、玆ではたゞさきに引用されたイェーガーの卓拔なる論文「文獻學と歴史學」(Philologie und Historie 1914) を指示するに止めねばならぬ。(六)

文獻學が古代の過去性をではなく、その「精神的現在性」を追究するとき、それは歴史學によりもむしろ哲學により多くの親似性をもつであらう。シュレーゲルは夙に「文獻學の哲學」(Philosophie der Philologie) の體系を構想した。(七) ボェックもまたこのことを充分意識してゐたやうにみえる。なぜならば彼は「認識されたものの認識」なる文獻學の定義に關説して、この問題に解明を與へてゐるからである。彼によれば文獻學と哲學との差異は素材にではなく見解に存在する。文獻學の目的は純粋に歴史的であり、偶然的なる存在から出發して、認識されたものの認識を客觀的にそれ自體として措定するが、哲學は概念から出發して、その上に自己の體系を樹てるために同じことをなす。すなはち哲學が歴史的なる現象における本質的なるものを概念によつて把握し、その内的核心に徹しようと欲すると

き、哲學はこの本質的なるものの外的表現とみなさるべき現象の知識を必要とする。かゝる知識を提與するのが文獻學である。しかるに文獻學もまた哲學なしにはその任務を全うすることができない。それは概念によつて自らの課題を遂行するのではないけれども、その究極の目的は概念を歴史的なるものの中に顯現せしめることにある。從つて文獻學的探究と哲學的探究とは相關的行程の中にあり、一が終るところに他が始まるのである。かくて文獻學と哲學とはあたかも哲學の歴史と歴史の哲學との關係の如くにあるであらう。(八)

著しくヘーゲル的なかゝる見解は、文獻學を歴史學から本質的に區別せざるボェックの立場にきはめて整合的である、と同時にそれに對してなされたさきの批評がこゝにも妥當するやうに思はれる。文獻學の使命は決して哲學にその素材としての偶然的現象の理解を提供することに止まるのではない。文獻學が古代の全科的一般學であることは決して古代において經驗的に「生起したもの」の知識の集成ないし體系を意味するのではない。それはなによりも先驗的に「創造されたもの」における「古代の人間性の認識」であり、古典的世界における「永遠の人間性」の學である。從つて文獻學は古典そのものの認識論であり、人間學であるとさへ言ふことができるであらう。かくて文獻學は却つて哲學の基礎學となるのである。すなはち古代哲學――とくにギリシャ哲學――が古代人、とくにギリシャ人の精神とその人間性とを概念としてのロゴスを通じて認識するに對して、文獻學はそれをいはゞ「肉となれるロゴス」を通じて認識するのである。ギリシャ人はビオス（生）とロゴス（理）との統一を自覺し、その調和に生きた典型的な民族であつたといはれる。我々がすでに他の機會に明かにしたやうに、(九)彼らにあつては哲學は勝義的に人間性の形成(paideia)の學であつた。しかも「古代の人間性の認識」を提示して現代の新しい人間の形成に寄與することはまさ

しく文獻學の課題なのである。(一〇) こゝに文獻學と哲學がではなく、文獻學の哲學が語られる所以が存在する。我々はこに新しき文獻學の理念をみる。かつてフィロロギアーがフィロムーシアーであり、ポリュマティアーであるよりも、より根源的にフィロソフィアーであつたことは決して偶然ではなかつたのである。

(一) Athenaeumfragmente 147.

(二) Boeckh; Enzyklopädie. S. 308.

(三) Jaeger; Philologie und Historie (Humanistische Reden und Vorträge 1937) S. 4 f.

(四) Usener; Philologie und Geschichtswissenschaft. (Vorträge und Aufsätze 1907) S. 20 ff.

(五) Ibid. S. 30. なほ Bernheim; Lehrbuch der historischen Methode und der Geschichtsphilosophie 4 1903. S. 78. 參照。

(六) Jaeger; op. cit. S. 11 ff なほ本書に對する拙稿、書評「新しきフィロロギーの理念」(本誌、第二卷、第一號) 參照。

(七) Friedrich Schlegels „Philosophie der Philologie." mit einer Einleitung hrsg. v. Körner (Logos, Bd. XVII 1928).

(八) Boeckh; op. cit. S. 16 f. 259 ff.

(九) 拙稿、「古代アカデミーとポリス」(本誌、第三卷、第二號) 其他。

(一〇) 現代においてかゝる立場を代表する主なる人として、文獻學者の側からイェーガーを、哲學者の側からシュプランガーを擧げておかう。Jaeger; Der Humanismus als Tradition und Erlebnis 1919. Humanismus und Jugendbildung. 1921. Platos Stellung im Aufbau der griechischen Bildung 1928. Die geistige Gegenwart der Antike. 1929. Die Antike im wissenschaftlichen Austausch der Nationen. 1930. (以上すべて Humanistische Reden und Vorträge に收錄)。

Paideia, die Formung des griechischen Menschen I. 1934. Spranger; Lebensformen[4] 1924. Humanismus und Jugendpsychologie 1922. Von der ewigen Renaissance (Kultur und Erziehung[3] 1925). Der Gegenwärtige Stand der Geisteswissenschaften und die Schule[2]. Aufruf an die Philologie (an Stelle der Vorrede). 1925.

82